

小論文 1 (日本語の課題)

※小論文 1 の解答用紙に記入してください。

【問題】

下記の課題文に登場する「私」は、新生児仮死の後遺症で脳性まひになりました。課題文には、「私」が小学生のときに参加した「障害児」<sup>(注1)</sup>のリハビリを目的とする約 1 週間の集団キャンプでの出来事が描かれています。

課題文を読んで、あなたはここでのリハビリにどのような問題点があると考えましたか？ まず、【場面 A】の「私とトレーナーの関係」と【場面 B】の「私と四つん這いの少年の関係」がどのようなものかを説明してください。その上で、ここでのリハビリの問題点を述べてください。(600 字以内)

【課題文】

小学生の私は毎年、関門海峡を渡って山奥にある施設に行った。一週間ほどリハビリの強化キャンプに参加するためである。そこは小学校とはまるで違う世界だった。

施設にいる大人は私の一挙手一投足をじっと見た。それは私のことを見ているという感じではなくて、何か私の気持ちの在りかとは別のところに焦点が合っているような、こちらからは関われないような視線だった。きっと大人たちは、「緊張が強いな、どういう介入がよいか」などと思いながら、私の動きを見ていたのだと思う。そんなまなざしの先で、私の体は緊張を強くして「障害児」になる。

————— 【場面 A】 —————

私が受けていたリハビリでは、リハビリをする側がトレーナー、される側がトレイニーと呼ばれていた。毎回のセッションは一時間半程度で、一日にそれが三～四回行われる。

セッションの内容はトレイニー一人ひとりの状態に応じて異なるのだが、私のセッションの前半は、過度な身体内協応構造<sup>(注2)</sup>のために硬くなった私の筋肉や関節を、トレーナーがストレッチのような方法でほぐす。そして後半は、ほぐされてぐにゃぐにゃになった私の体にトレーナーが介入し、「健常」な姿勢や動きを与えようとする。〔中略〕

〔ストレッチが終わると〕トレーナーは、トレーナー自身の体全体が私の視界に入るくらい遠くに移動し、私が課題としてとるべき姿勢や動きを実演して見せる。〔中略〕

〔私は〕トレーナーの運動を私の身体で再現するイメージに集中する。そうするうちに、

意識は外界から身体の内側へと向いていく。〔中略〕

そこへ、姿の見えないトレーナーの声が聞こえてくる。

『もっと腰を起こして』

姿の見えない声は、あらがえない力を帯びる。私からはまなざせない場所にいる声の主は、一方的に私をまなざしている。私は焦って、私の内部に「腰」を探る。

「これだろうか。これが腰だろうか。腰を起こすというのは……こうだろうか」

私は自信のないまま腰を起こそうと動かしてみるのだが、すぐに、

『違う！　ここだよ、ここ！』

という大きな声とともに、体のある一箇所に、指でつつかれたような点状の刺激を感じる。私は、「ああ、ここが腰だったのか」と、指でつつかれた場所に意識を向ける。腰の場所はどこだろうと自分の身体内部を隈なく探っていたときには見つけられなかった場所に、腰はあった。腰は、意外な場所から急にその姿を現した。それは、他者だ。私と腰とのあいだには、互いに相手の動きを感じ合い、相手の動きに影響を与え合うような関係がはまだ成立しておらず、体の一部とは言いがたい状況で、私がどうすれば腰がどうなるのかまったくわからない。私はその腰なるパーツを操れない。腰を起こすといっても、どうしたらいいのかわからない。声は続ける。

『背中も起こして！　ここ！』

また点状の刺激を感じる。

#### ————— 【場面 B】 —————

夕食を食べ終わると、入浴の時間になる。キャンプに来ている子どもたちは、多かれ少なかれ入浴に時間がかかるので、手のかからない子から順に浴場へ行った。私の順番は終わりのほうだった。私は風呂を待つあいだ、たいてい畳の敷かれた休憩部屋で寝転がってぼんやりとしていた。お腹も満たされ、ますますウトウトしてきて、このあと風呂に入るのは面倒くさいなと思っていた。

私がいたのは歩かない子たちの部屋だったから、私の近くには同じように順番待ちの子たちが数人寝ころがっていた。同じ部屋には、私と同じように腹ばいで動く人もいれば、四つん這いできる人、ほとんど動かない人もいた。歩ける子たちはたいてい別の部屋だった。消灯の時間まで、みんな思い思いに過ごす。やりとりはあまりない。

〔同じ部屋にいた〕四つん這いの人はいつも同じ歌手のテープを家からたくさん持ってきて

ていて、同じく家から持ってきた大きな銀色のラジカセを使って小さい音で聴きながら、ときおり口ずさんでいる。私はそんな彼のうっとりした表情を見ていることが多かった。でも、じっと見たら悪いかなと思っていたので、ちらちらと横目で見た。

彼はとても静かで、ほんとうに怒る姿を見たことがなかった。そして口数が少なく、ゆっくり動いた。昼間リハビリ室で「イタイイタイ」と叫んで苦痛に顔をゆがめる彼に、[別のトレーナーに] 組み敷かれた私はたまに気づくことがあった。しかしトレーナーが攻めの手を緩めると、彼はまた何事もなかったかのようにいつもの無表情に戻った。私はそんな彼を見て、悲しみと強さが自分の中で満ちてくるような気分になった。

そんな彼が、リハビリから解放された夜に、昼間見せないようなうっとりした表情でひそやかに音楽に身をゆだねている。それはとても官能的な姿に見えた。私には彼の気持ちが本当によくわかるような気がした。そんな彼を見ているだけで、私もゆるゆるとほどけていくような快楽を追体験できた。だから私は何度も彼を見た。

(熊谷晋一郎『リハビリの夜』医学書院、2009年より、一部改編)

(注1) 問題文と課題文にある「障害児」という表現は原文での表現を踏襲している。

(注2) 「過度な身体内協応構造」とは、単に寝ころんでいる時には体の筋緊張を自覚しないものの、何か目的をもって運動を始めようとする時と背中から腰や足に至るまでが同時に硬くなり、ある部位を動かそうとすると他の部位も一緒に動き、焦れば焦るほどそれは強くなるというもの。